

学体連会報

発行日 平成元年 2 月 20 日
 東京都渋谷区代々木神園町 3 番 1 号
 国立オリンピック記念青少年総合センター内
 財団法人 日本学校体育研究連合会
 発行者 会長 大石 三四郎

昭和の時代の体育と私

会 長
 特殊法人 日本体育・学校健康センター理事
 学校法人 埼玉短期大学 学長

大 石 三 四 郎



昭和の初期から東京高等師範学校体育科を卒業した人は、昭和の時代の体育の発展に大きな役割を果たした。また、昭和 4 年に発足した東京文理科大学卒業の体育関係者は、旧制大学卒業者ということで一般にはエリートとして取扱われた。

私は昭和 9 年に東京高等師範学校体育科甲組に入学し、昭和 12 年 12 月に近衛歩兵第二連隊に入営し、その後、昭和 15 年 12 月まで兵役に従い、この間、幹部候補生として少尉に任官し、野戦にも参加し、左腸骨々折貫通銃創の戦傷を経験した。次いで昭和 16 年に東京文理科大学教育学科に入学し、昭和 18 年 9 月に卒業、千葉師範学校に奉職し、次いで 19 年 6 月、石川県金沢市に新設された金沢高師に赴任、その 8 月に佐倉の歩兵第 58 連隊に召集され、終戦時、歩兵第 321 連隊として広島地方に駐在し、被爆する。その後、金沢高師に帰任した。

昭和 20 年以後は、金沢での第二回国民体育大会に参加、ここに、サッカー・ハンドボール・バドミントンなどの協会を創立し、国体誘致に協力した。その後、新制大学発足と同時に金沢大学教育学部に体育科を設置することに成功する。

昭和 27 年 6 月、東京教育大学体育学部に出向し、その後東京を中心として体育の発展に力を尽くす。この頃、新体育学講座（逍遙書院）を刊行し、体育学関係の学術出版に努力、昭和 56 年頃には 80 巻に達していた。残念なことに国谷裕一社長が亡くなったので途中で休止した。

体育としては、新制大学発足と同時に体育学部などと、一応他の学科と肩をならべて、その位置を確保し、体育学士なる学士号を出すようになったので

ある。考えてみると、明治時代の師範学校、東京師範学校、東京高等師範学校と、体操伝習員養成科から文科兼修体操科などを経て、大正時代に東京高等師範学校において、文科、理科と対等の本科の位置を確保し、次いで東京文理科大学教育学科の講義に体力測定、体育史、体育学などの開講があり、旧制大学での学科創設の準備を始めていたのである。しかし、終戦後新制大学の中に学科の設置に成功し、一応学士号授与のところまではもってきたのであるが、その後、アメリカ式研究組織における修士号、博士号のことになる、新しい科学としての体育学はその仲間入りが出来なかったのである。しかし幸いにも、大学での学生運動などを契機として、大学改革の気運に乗り、新構想大学としての筑波大学法案の成立とともに、大学に体育科学系を開設し、そこに筑波大学が大学院大学であるということで修士、博士の課程の設立を実現する。ここに初めて体育が体育科学として、他の諸科学と対等に肩をならべることができたのである。筑波大学は昭和 49 年に設立されて今日に至り、多くの体育関係の修士、博士の学位を授与している。

一方、昭和の時代ではスポーツ方面での発展に目ざましいものがあり、その実体は今日、マスコミにおけるプロスポーツなどの人気で御承知の通りである。

私自身も昭和 9 年より 12 年まで、東京六大学第一部蹴球リーグの文理科大学チームの一員として参加し、1 年生のときはキーパー、その後はレストウィングをやった。また昭和 16 年以後、2 年間、文理科大学蹴球部の監督に就任し、その後昭和 27 年、教員

として金沢大学より東京教育大学に出向後は、専ら大学のサッカー部の振興に力を尽くした。しかし、東京教育大学の弱体ぶりは大学そのものの弱小にあると思ひ、筑波大学創設には大いに力を入れたと同時に、体育科学系の入学に推薦入学制を導入した。また、大学での運動関係の財源の確保を期待して、茗溪会とのつながりの必要上、筑波大学の紋章に桐の葉を導入して、茗溪の伝統を受けつぐことを明示した。

私ははからずも、昭和53年3月全日本学生選抜チームの団長として、アセアン6ヶ国親善試合旅行に参加した。そして、第一戦の比国とのマニラでの試合で、奇想天外の作戦——ゴールキーパーにコーナ

ーキックをさせ、日本国内では実行できなかったことをトウトウ実現した。

この他、全国大学体育連合、日本学校体育研究連合会、日本スポーツ教育学会、心身障害者関係の養護学校関係の研究にも力を入れた。

更に私は社会スポーツの振興に努力した。ローラースケート、ボウリングはいうまでもなく、その他、筑波大学の教養科目の実技にヨット、射撃等各種野外活動を広範囲に取り入れ、最近筑波地区にゲートボール場としてつくば国際スポーツセンター（つくば市大角立1774 Tel. 0298-55-0333）の設立に協力して、生涯スポーツ事業にも力をそそいでいる。

格 技 から 武 道 へ

文部省初等中等教育局教科書調査官 丹 羽 昇



〔格技から武道へ〕

国際化が進むなかで、海外から我が国への関心が高まるいっぽうである。このようなときに、「格技」も、国際的にも通じる「武道」という名称に改めたらどうか、という提案が関係者などからなされた。

これは、昨今ではじめて出てきた提案ではなく、前回の指導要領の改訂直後（昭和53年ごろ）にもあったが、そのときには改訂直後ということで見送られることになった。

今回、文部省は上述した問題提起を踏まえ素案を作成し、昭和61年7月9日、大局的に各界から意見を聴取する場がある文部省の教育課程審議会に提出した。同審議会では、国際化にむけて日本古来の伝統を重んじ、従来の「格技」を「武道」と改称するという文部省案に異論はなかった。

同審議会は、昭和62年12月24日に、それまでの審議の結果をまとめ、「幼稚園、小学校、中学校及び高等学校の教育課程の基準の改善について」の答申を文部大臣に提出した。答申のなかで、今回の教育課程の基準の改善の目指す方向の4つの視点の1つとして、「国際理解を深め、我が国の文化と伝統を尊重する態度の育成を重視する」ことをあげ、保健体育の改善の基本方針のなかで、「現行の格技の領域については、名称を「武道」に改め、我が国

固有の文化としての特性を生かした指導ができるようにする」ことを提言している。

「格技」という名称は、学校体育で各種の運動を領域区分するため、主として学習指導要領上の1つの運動領域名称として、戦後から今日まで扱われてきたものである。しかし、柔道、剣道等は、もともと我が国古来の伝統に根ざす武道であり、国際的にも、茶道、能などとともに日本の伝統文化の1つである武道として広く理解されている現在、学習指導要領においても、武道という名称を用いることの方が適当である。」としている。

主な改善事項を具体的に述べると、つぎのようである。

（中学校）

・「武道」の領域については、柔道、剣道及び相撲の中から選択して履修できるようにする。また、学校や地域の実態に応じて、その他の武道についても弾力的に取り扱うことができるようにする。

・「武道」及び「ダンス」の領域については、男女とも履修できるようにする。

（高等学校）

・「武道」の領域については、柔道及び剣道のいずれかを履修できるようにする。また、学校や地域の実態に応じて、その他の武道についても弾力的に取

り扱うことができるようにする。

・「武道」及び「ダンス」の領域の履修については、中学校と同様の趣旨により改善する。

〔学習指導要領（保健体育）の改訂について〕

文部省では、教育課程審議会の答申を受けて、学習指導要領の改善に関する調査研究協力者会議を開いて、具体的な指導内容等の検討を行っているが、武道関係の改訂を含む新学習指導要領の告示を、中学校、高等学校とも平成元年3月にする予定である。

新学習指導要領の全面実施は、中学校は平成5年（1993）4月、高等学校は平成6年（1994）4月からである。新学習指導要領の告示から全面実施までは、新学習指導要領の移行措置の期間となる。

現在、検討がなされている武道関係の改訂案を、現行のものと併記してみよう。

	現 行	改 訂 案
中 学 校	〔格技〕 相撲、柔道、剣道のうちから1つを選んで主として男子に指導する。	〔武道〕 柔道、剣道、相撲のうちから1つを選んで指導する。学校の実態により、なぎなた等も指導できる。
高 等 学 校	〔格技〕 柔道、剣道のうちから1つを選んで、主として男子に指導する。学校等の実態により、相撲、弓道、なぎなた等も選んで指導できる。	〔武道〕 柔道、剣道のうちから1つを選んで指導する。学校等の実態により、相撲、なぎなた、弓道等も指導できる。

今回の武道関係の改善の大きな特徴は、名称の変更と男女ともに履修できるようにしたことである。また、なぎなたや弓道などについても学校の実態により指導できるように考えられている。

武道憲章（昭和62年）に、「かつて武道は、心技一如の教えに則り、礼を修め、技を磨き、身体を鍛え、心胆を練る修業道・鍛錬法として洗練され発展してきた。このような武道の特性は今日に継承され、旺盛な活力と清新な気風の源泉として日本人の人格形成に少なからざる役割を果たしている。…」

とあり、さらに、武道の目的は「武技による心身の鍛錬を通じて人格を磨き、識見を高め、有為な人物を育成すること」、稽古に当たっては「終始礼法を守り、基本を重視し、技術のみに偏せず、心技体を一体として習練する」とうたわれている。

今回の名称変更の目的は、まさに戦後、武道から脱皮した新しいスポーツとして定着していた柔道や剣道などを、我が国の伝統文化を尊重した視点からとらえ直そうとするものであり、人間育成の道として武技による訓練を通しての心身の教育を充実しようとするためのものである。

〔教育課程の変遷（武道領域の内容の変遷）〕

武道という名称は、明治以降に心技一如を現す言葉として出てきたものと思われる。全国の中学校・師範学校の男子の正課の教材として行うことができるようになったのが明治44年である。昭和6年には、中学校令施行規則、師範学校規程の改正で、柔道と剣道がはじめて必修科目として取入れられた。この年に始まった満州事変を転機として、武道は教材として次第に重要視され、昭和14年には小学校でも必修となり、昭和16年から18年にかけて学校教練教授要目、各学校体練科教授要目が公布された。その結果、男子においては武道は教練、体操とならんで体練科の3分野の一角を占めるようになった。さらに女子も中学校、師範学校で難力教授要項が定められ実施された。

昭和20年の終戦を機に、体育は軍事的訓練と深い関係をもっていたため体練科の内容から軍事的色彩のある教材の削除と剣道、柔道、難力、弓道の武道の授業を中止した。とくに武道は課外活動も中止された。

その後、民主的なスポーツの内容を備えたという理由で、昭和25年に柔道、昭和26年に弓道、昭和27年にしない競技がそれぞれ中学校以上に、さらに昭和28年には剣道が高等学校以上に実施できる学校で行ってよいことになった。

昭和33年の中学校の学習指導要領、昭和35年の高等学校の学習指導要領においては、格技の名のもとに、「すもう」、「柔道」及び「剣道」の3種目が、体育の内容として取入れられた。そして、中学校では各学年でこれらの種目のなかから1種目を、高等学校では1種目以上を選んで男子だけに指導することとしている。

今回の学習指導要領の改訂で、武道の名称が体育

の授業に43年ぶりに登場することになる。

〔今後の課題〕

今回の格技から武道への名称の改訂にともない、武道の学習内容については、現在、中学校と高等学校の学習指導要領の改善に関する調査研究協力者会議で鋭意検討中である。その論議のなかで、武道の学習内容は、技能と態度で構成できるが、武道固有の特性に関する内容は、態度の内容とすることが適当ではないか。また、態度の内容としては、我が国固有の文化としての特性を生かした指導ができるようにするために、伝統的な行動の仕方に意を注ぐとともに、互いに相手を尊重する態度を養うことが大切であろう。伝統的な行動の仕方は、人間形成を図るための自己統御（セルフコントロール）として、礼や形を導入することによって達成されるのではない。などの意見が交わされている。

ここで、礼や形の意義について少し考えてみたい。礼や形を武道それぞれの基本にそった形にすると姿勢が整えられる。姿勢は意志とは無関係に内臓などの働きを支配し、調節する自律神経と深いつながりがあるため、それによって心が整えられるようになる。坐禅を組んだり、正座をしたり、姿勢を正すと心が落ち着くのは、そのせいである。剣道や柔道、相撲に限らず、舞踊や茶道、花道、仏教の修行の場合でも形を整えるのは、見た目美しく映すためではなく、心の問題だからである。武道や多くの芸道において、礼や形を重んじた「型」から入る指導が主体となるのは、このような意味があるからである。「型から入って、型から出る」それが本当の修行のありかたで、修行を積み重ねれば自然にそのような形が備わってくるようになる。どのように動くかということよりも、どういう姿勢で決めるかが武道では大切である。西洋のスポーツは一定の時間経過のなかで、勝敗を競いあうのに対し、柔道や剣道では、かたずきのむ一瞬の間に勝負が決まるのである。

今回の教育課程の改善の基本方針は、前回の教育課程の基準でうちだされた「自ら考え主体的に判断し行動する力を育てる教育への質的転換を図る」という基本的な視点を踏まえつつ、「21世紀に向かって、国際社会に生きる日本人を育成する」という観点に立ち、「国民として必要な基礎的、基本的な

内容を重んじ、個性を生かす教育の充実を図る（このねらいを達成するためには、選択履修の幅の拡大や個人に応じた多様な指導方法を工夫する）」とともに「自ら学ぶ意欲をもち、社会の変化に主体的に対応できる、豊かな心をもちたくましく生きる人間の育成を図る」ことがある。

体育については、小学校、中学校及び高等学校を通じて、「生涯体育・スポーツと体力の向上とを重視する」観点から、「児童生徒が自ら進んで運動に親しむ態度や能力を身につけ、また、心身を鍛えることができるよう、児童生徒の心身の発達特性と運動の特性との関連を考慮して内容の改善を図る」としている。

今回の改善の方針を生かすためには、つぎのようなことについて考えておく必要がある。

1. 国際的にも理解されうる武道理念の確立
2. 生涯体育・スポーツと武道との関係
3. 自ら創意工夫して、自分にあった柔道や剣道等をつくっていく楽しさを味わえる指導法の工夫
4. 個人差、年齢差、性差に応じた合理的な練習法など。

とりわけ、指導に携わる者は、国際社会に通用する人間育成に役立つ武道の指導理念を踏まえて、指導にあたる必要がある。そのために、指導者は日頃の武道の習練を通して、高邁な自己統御を先ず身につけるべきであろう。

〈武道〉への名称の変更にともない、〈格技〉との違いを、礼、形、あるいは格技のときに使用していた“練習”を、柔道や剣道のように、すでに完成された型をもち、それへの接近をトレーニングの大きなねらいとするときに使われる“稽古”という表現に改めようか、など、種々論議がつくされてきた。が、指導のうえでの大きな変化は今のところ少ないものと思われる。

武道は、心身を陶冶するものの一つとして価値あるものであるが、戦前、戦時中のように、その利用の仕方においては問題を引き起こす危険がないわけではない。武道を過大評価せず、歴史的に正しく理解して、行ったり指導することが、武道をよりよく発展させることになるのではなかろうか。

やる気をおこさせる小学校体育の学習指導

三重大学教育学部教授 作 野 史 朗



1 はじめに

これからの時代は、生涯学習の時代である。私達一人ひとりが“より良く生きる”ことを目指し、自ら高まりを求めて学ぶことを、生涯にわたって実践していく時代である。その底に必要なものは“やる気”であることはいままでもない。

体育は、人間が“より良く生きていく”ために、運動とどう関わっていくのがよいかや、運動と良い関係を持ち続けることを学習する教科である。私達は生まれてから死に至るまで、幾つかのライフステージを経ていくが、それぞれのライフステージで、運動と良い関係を持ち、将来においても運動と良い関係を持ち続けるために、何をなすべきかを学習していくのが体育であるといえよう。そして、小学校期は人間のライフステージの中では、一生をより良く生きていくための、基礎・基本を学習する、極めて重要なステージである。

このような観点に立って、与えられたテーマについて、先程行われた、第27回全国学校体育研究大会愛知大会第3分科会から例を取り、考えてみたい。

2 やる気をおこさせる小学校体育の学習指導

1) 運動学習のステージをとらえた指導であること
小学校期は、人間のライフステージという点からみれば、一つのステージではあるが、これを運動学習と言う観点、換言すれば、児童にとって学習しようとする運動がどのようにとらえられているか、という観点から見直してみる必要があるのである。そして、このような見方で共通して運動の意味がとらえられている範囲を、一つの運動学習のステージと考えればよいのである。発達段階によって、運動の意味のとらえ方が違うから、その意味が共通している範囲を、一つのステージとして設定し、その上に学習指導を組めばよいということである。波多野教諭の2年生「マット遊び」では、児童からみた特性を、マットの上で自分の体を回転させたり移動できるのが楽しい、動物ものまね遊びが楽しい、歌やリズムに合わせて体を動かすのが楽しい等とおさえ、この特性を味わうことができるよう、学習が組み立てられていたのが、これは低学年の頃にマット運動を行うためのステージを、このようにとらえればよ

いという例を示しており、これが高学年の頃のマット運動のステージとはならないことは言うをまたない。高学年では、改めて児童の側からステージの据え直しを行い、その上に学習を組み立てなければならないのである。このように、運動学習のステージを、学習指導を行う児童を対象とし、緻密にとらえていくことが、やる気をおこさせる基本となるのである。

2) 一人ひとりに“めあて”を持たせ、その“めあて”が達成できる学習の場を準備すること。

児童は、運動学習において、このようになりたいという願いを持って（持たせる場合も含む）いる。それぞれの時間で、このめあてが達成できること、あるいは達成できる見通しが立つことが、やる気をおこさせる要となる。

このためには、一人ひとりの学習の姿が、めあてにそって正確に記録できる学習カードやグループノート等が準備されること、まとめの段階で、本時の学習の成果を認識させること等を通して、次時のめあてをつかませるとよい。奥村教諭の6年「跳び箱運動」で、これが実証されていることを想起できる人が多いはずである。

めあてを達成させる学習の場の設定は、一人ひとりの学習を保障するため、是非必要なことである。学習の場は、物理的な場ではなく、心理的に運動学習に引きこんでいく場であることも重要である。

横地教諭の6年「対立する感じ」で、対立する感じ（この題材はけんかであるが）を、さらに強めるために空間を工夫して表現するという場面で、一人ひとりの創った動きを生かしていく場の設定や、新しい空間の発想ができるための隊形の工夫に感心させられた。また、マット遊びでは、一人ひとりが動きを開発し、発展させていくという点からの、めあてが持ちやすいような場の設定がなされていた。

学習を保障し、めあてを達成させていく事は、全てが教師の発想により、なされると失敗する。子供が学習を、そしてその学習の場を、みずから工夫し、発展させていく可能性を内包した、もとの運動とその学習の場を設定することが、教師に与えられた使命であることを強く認識していただきたいのである。

3) 教師の出場(でば)と出方(でかた)を工夫すること

小学校の子供にとって、教師の一挙手、一投足は大きな意味を持つ。自分で「できたな」と思ったとき、速くからでも、先生が目にとめてくれ、うなずくなり、にっこり笑いかけてくれたとき、子供のやる気は倍増する。まして、その前後に適切なアドバイスがあれば、それはさらに何倍増になる。そのような「でば」と「でかた」をしてほしいのである。

跳び箱運動では、どうしても跳び越せない女兒が2人いた。自分たちで、励まし合い、工夫あって学習していたが、なかなか成功しなかった。次第にやる気がなくなっていくのが、手にとるようにわかった。殆どやる気が無くなったのではないかと思わ

れた頃、先生がやってきた。熱心な励ましと、適切なコメントが次から次へと出された。先生の全身から溢れでる熱意が子供に次第に伝わっていき、再びやる気がみち溢れてきたとき、1人が、そしてまた1人が成功した。そのときの子供の、あの嬉しそうな顔を忘れることはできない。「でば」と「でかた」がわかっている先生だからこそ、先生と子供の間心の通い合いがあったからこそ、あの場面が出現したのである。まさに感動の場面であった。

やる気をおこさせるための指導のポイントとして、学習過程の組み方や学習集団の組織の仕方も重要であるが、与えられた紙数が尽きた。またの機会に譲ることにして稿を終える。

終わり



「やる気をおこさせる中学校体育の学習指導」

愛知教育大学教授 天 野 彰 夫

本年度愛知県で行われた、第27回全国学校体育研究大会に参加させて頂く機会に恵まれた。初日のシンポジウム「これからの学校体育」のなかで、パネラーの三ッ谷洋子氏が、日本と外国のスポーツ指導の際の考え方の違いについて述べられた。その主旨は、プロテニススのチャンピオンの事例を挙げて、“日本では型にはめ込む指導が多く、外国では多少の欠点には目をつぶし、良いところを伸ばしていく指導が行われている”とのことであった。スポーツのコーチングと、学校体育の指導との差はあるかも知れないが、型にはめ込み、欠点を矯正する指導は日本の学校体育指導の主流であると、私もかねがね思っていたので、意を強くした。

愛知県では、ときどき「つまづきを克服する**指導」というような研究主題についての発表が行われることがある。揚げ足を取るような感じがしつついつも気になって仕方がない。つまづきがないと、運動は上達しないのか？ 欠点があって、これを克服しないと、上手になれないのか？ もしも欠点の無い人が居たら、その人の技能の上達は望めないのか？ などなど、このような考え方には、ついていけない違和感を感じる。と同時に、この考え方が、骨の髄まで私の中にも染み込んでいることも感じている。型にはめ込む指導についても、常々問題を感じており、この大会で問題提起をしようと思ってい

た事項の一つであった。研究協議で何が問題になるか迷いつつ、この2つの問題は機会があれば触れようと思い、二日目を迎えた。

欠点矯正型指導と長所をより伸ばす指導

まず欠点を指摘して、次いでその矯正方法を指導するというのは、最も普通に行われている指導法であろう。悪いという事を納得させ、本人がそれを承認しなければ、次の段階に進めないのである。まず頭を叩き、それから無でてあげる指導である。普通の人は頭を叩かれた段階で、「やる気」は減少する。しかも、自分では悪いと思っていないことを、無理やりに納得させられるような事態にでもなれば、最悪である。明治以来、示範一矯正による指導は、日本の学校体育指導の主流であった。体操領域の指導は、それでも良いかもしれないが、他領域の指導でいつまでも、これが主流であっても良いのであろうか。

良いところをより伸ばす体育指導では、どんなに運動の不得意な人でも、どこか良い所があるはずであるとの考えが基盤として存在する。もしも、どこにも良い所の無い人が居たとしても、どんなに小さい事でもいいから、無理をしてでも良いところを捜して、それを認める。良い所を認め、指摘して誉める。そして次に、どうしたらもっと良くなるかを指導する。これがこれからの体育指導にとって、一

番大切なことになるであろう。いくつになっても、誉められると嬉しいものである。児童生徒にとって、指導者に認められ、誉められることは「やる気」を起こさせ、意欲的に取り組ませる事となる。

型にはめ込む指導と個を大切にすること

学体連の第7分科会の研究主題は、「仲間とともに学び、運動する喜びを味わわせる指導と評価」であった。その具体的な学習の領域は、ボール運動であった。ボール運動でも、型にはめ込む指導は、よく行われている。例えばバスケットで、チェストパスのやり方を一生懸命に教える。子どもは、ゲームの中ではチェストパスは使わない。ゲームで全然使わない技能を、練習しなければならない子どもの身になって欲しい。ゲーム場面で、チェストパスをどの様に使用したら効率的であるかの指導は、必要であろう。しかし、ボールの持ちかた、肘、投げかたの指導などは、もっと技能が上達してから指導しても遅くはないであろう。

一人一人の創意・工夫を大切にすること

ボール運動の指導で、どのような場面で何をしなければならぬかを、もっと中心的に指導すべきであろう。場面を読む能力、敵・味方のいる中で何をしたらチームのために一番役にたつかの判断力の指導が大切であろう。チェストパスのように、個々の個人技能の型を教えても、あまり役にたたないであろう。個人技能の指導より、チームの一員として何をすべ

きを考えることの指導が大切である。指導要領でも、集団技能の重視という形でこの事を強調している。この判断力は、考え方により色々なバリエーションがある。正解は一つでない。正解がいくつもあることを、指導するのは難しい。しかし逆に、色々な考え方を認めるためには都合のよい方法であろう。一人一人の創意・工夫を大切にすることによって、個性を尊重し良いところを認め、人の意見を聞くことにより自分の意見がより深まっていくものである。体育の学習指導では、汗をかく事が強調されている。しかしこれからは、「汗を出せ・知恵も出せ」または「走りながら考え・考えながら走れ」が強調されなければならないであろう。第7分科会では、ゲームの様相を中心にした討議がなされ、良い考えが沢山だされた。

まとめ

特にこれから体育指導で留意して欲しい事項として、「良いところをより伸ばす」と「創意・工夫を大切に」の2点を指摘させて頂いた。

学体連の研究大会に参加して、感じたことというより、不断考えていることを書いた。このような研究会に出席して感じることは、出席している先生方のレベルの高いことである。同時に忙しくて大会に参加できない先生方にも、色々な考え方のあることを知って欲しいと思い、分科会で話しかかったことを書かせて頂いた。



「やる気をおこさせる高校体育の指導法」

大阪体育大学教授 山 本 隆 久

1. はじめに

心身ともに多感な高校時代の過ごし方は、その後の人生に大きな影響を与えることは、今さら言うまでもなく、十分に承知しておられることである。

わが国の社会情勢は、工業化社会を経て、ポスト工業化社会、情報化社会に突入している。運動不足の招来、創造行為の欠落などから、心身の健康阻害が問題となり、早急な対策の立案とその効果的な実践が望まれている。加えて、高齢化の急速な到来は、慢性的な疾病の増加を促し、医療費の増大が見込まれている。莫大な医療費の中でも、運動不足が誘因となるいわゆる運動不足病(糖尿病・高血圧症・心臓関係の疾患・脳血管の疾患・腰痛等)による医療

費は約5兆円〔約15万円/年/人—1987年度厚生省資料より推定〕にも達している。しかも、これらの直接的な医療費に止まらず、間接的な医療関連費用は、少なくとも2倍必要であると推測できる。

一方、運動することにより、この医療費は約20%節減することができる、と言う予測もある。(経済企画庁推論)生涯、何等かの運動(スポーツ活動を含む)を実践することは、何物にも代え難い健康の維持・増進になくなくてはならないものである。

幸いわが国では、学校体育が必修として位置づけられており、生涯体育を目指した授業が展開されて来ている。職場における調査から、就職後も積極的にスポーツ活動に参画している人達は、異口同音に

高校時代の体育授業および運動部活動の影響を多分に受けていることが判明している。生涯体育を目指した体育を効果的に展開するためには、必然的に生徒達が『やる気』をおこすような指導が要求されるのは当然のことである。体育活動は、理解もさることながら、自ら進んで実践しなければ、同じ運動を繰り返しても、効果は期待し難いものである。言い替えば、如何に楽しく、『やる気』をおこさせるか、大きな課題であろう。一人一人の生徒はそれぞれの個性を持ち、技能や体力にも差があり、しかも、異った生徒を一つの集団として授業を展開していくのであるから、決して生易しいものではなく、諸先生方の日常の御苦労に対して、深甚な敬意を払うものである。ここでは、経験も乏しく、浅学菲才ですが、日頃感じている一端を申し述べて、御参考にして頂ければと考えた次第である。幸い、先の全国学校体育研究愛知大会に出席する機会を得て、素晴らしい研究活動を目の当たりにすることができたので、この経験を生かして申し述べることに致しました。

2. 学校体育における効果的なバレーボール指導をめざして

バレーボールは年齢・性別を問わず気軽に誰でも行えるスポーツであり、生涯スポーツへの継続発展が望まれる反面、ボールに触れる毎に反則の危険が常につきまとい、さらに個人の技能が集団の技能に結び付け難い種目でもある。またボールを『捌む』ことは反則になり、必ず明確に『ヒット』しなければならず、しかも 1 ラリーで 3 回（場合によっては 4 回）しかボールをプレイできない、コート全面がゴールである等々の特性から、易しいようで、決して易しくない面も多々ある。（これは他のスポーツ教材でも同様であろう）今回の研究授業では、効果的の一言い換えれば生徒が楽しく、自主的に、積極的に授業に参加できるように工夫されていた。楽しさ、おもしろさから入る導入で、興味づけの段階で細かな工夫がなされていたようである。楽しい体育学習は、生涯体育に進む根底となるものであるが、同時に、それ相応の技能をも習得しておかなければ楽しさが持続し難いものである。かって『楽しい体育学習とは』と言うテーマで西地区の学校体育実技指導者講習会（文部省）で、中学校や高校の先生方の率直な

御意見をお聞きしたことがあるが、その折に、出された御意見の中に、個人の技能からの導入か、ゲーム形式による楽しさ、興味づけが話題の中心であったように記憶している。二つの矛盾した要求を、今回の場合は、用具（コート・ネット）や簡易ゲームの方法に工夫を加えて、授業が展開されたのが、印象的であり、相当の効果があったように見受けられ、担当の川口教諭の御努力に敬服したものである。中でも、一校時の研究授業で、本時に到る過程も併せて展開され、参加者には貴重な資料を提供されたと考えられる。その結果、討議も活発で実のある内容で時間切れが残念な位であった。用具の工夫について私見を述べれば、ボールについての工夫がなされないものか、とよく考えさせられる。現在の用具の中で、現場ではどうしようもないのがボールである。体力的に恵まれない生徒にとって、通常のボールは少々大きく、重量も重いのではないだろうか。ビーチバレーが盛んに普及されつつあるが、ビーチバレーのボールでは、通常のボールとの連環が未だ乏しいようであり、一層の工夫が必要であろう。

3. まとめ

自主的に楽しく運動に参加した場合と、ただ指導のままに一悪い言葉で言えば強制されて一参加した場合とでは、同じ運動を同じように実践しても、運動の効果が全く異なる、と言われている。自主的に楽しく参加するには、内容を充分に理解して、参加するだけではなく、参画させるように計画すべきではないだろうか。ゲームノートに記録して反省の資料とし、次回への準備にかかる工夫等も『やる気』をおこさせる方法の一つであろう。クラブ活動は色々な種目が用意され、順序等は決められているものの、各種のスポーツ体験の中から、それぞれに合った将来のスポーツ種目を見出すのに、大いに役立つであろう。さらに、設備・時間面で欲を言えば、全員汗みずくになっても、快適に後始末ができるようなシャワー、体育の授業の終わった次の校時までによとりを持ち、爽やかな気分反省、次への立案等ができるようになれば、体育授業の一層の発展が期待でき、ひいては、高校時代までに生涯体育への習慣づくりに寄与できるのではないだろうか。

~~~~~ 地方だより ~~~~~

現 状 と 課 題

秋田市立仁井田小学校教諭
秋田県学体連事務局長

佐々木 信 吉



1. 学体連組織の現状

我が県の組織及び活動は、秋田市立八橋小学校校長工藤一郎を会長に、大きく 2 本の柱によって組織され活動している。

そのひとつは小・中学校合同の県教育研究会体育部会（会長 工藤一郎・事務局 秋田市立仁井田小学校佐々木信吉）であり、またひとつは県高等学校教育研究会保健体育部会（会長 県立秋田商業高等学校校長笹村健明・事務局 秋田中央高校三船新次）である。

小・中学校の組織は、実質的にはさらに都市毎に鹿角・大館北秋・能代山本・男鹿・南秋田・秋田・河辺・本荘由利・大曲仙北・横手平鹿・湯沢雄勝の 11 支部に分かれて着実なる活動を続けている。

現況と千葉大会のご案内

千葉県学校体育連合会長
千葉県立君津高等学校長

鈴木 純 也



はじめに、昭和天皇の崩御に際し、千葉県学校体育連合会を代表して、謹んで哀悼の意を表します。

本県学体連の活動は、校種別代表による理事会が主体となって推進し、その集大成として、例年秋に研究大会を開催し、多数の参加者の好評を博しています。本年度も「個を生かす体育指導の創造」を大会主題として、県教育長をはじめ、多数の来賓・関係者が一堂に会して開催されました。開会式に続き優良校・功労者の顕彰、さらに小中体連功労者・優秀選手の表彰を経て、「生涯スポーツへ向けての自覚性・自主性の育成」と題した、横浜国立大学助教授落合優先生の記念講演をいただきました。午後は、校種別の実演授業と研究発表・研究協議と講評を終え、さらに研究を前進させることを誓い合って閉会いたしました。

さて、千葉県は、本年、全国学校体育研究大会開催の光栄に浴しました。昭和 37 年第 1 回大会を開催し、さらに「平成」に改まった新しい幕開けのトップを飾っての開催は、心改まるものがあります。21 世紀に生きる児童・生徒 1 人ひとりの健康の増進と体力の向上を図り、逞しい心身を培うために、自ら運動に親しみ豊かな心と健やかな身体を育て、生涯スポーツにつなぐ新しい学校体育を目指して、一層の充実・発展に資することのできる大会にしたいと念願しております。大会は、11 月 9 日・10 日、千葉市を中心として開催すべく慌しく準備を進めておりまして、何かと支障もあるかと存じますが、先催県に負けない充実した内容とすべく、鋭意努力中でありま。今よりご予定にいらていただき、全国各地より多数のご来葉を心よりお待ちしております。

第 26 回中・四国小学校体育研究大会を終えて



松山市立生石小学校校長
中・四国小学校体育連盟会長
愛媛県小学校体育連盟会長

門 屋 一 郎

昭和63年10月28日、爽やかな秋晴れのもと、中・四国各県から1,000 余名の小学校体育関係者を迎えて、第26回中・四国小学校体育研究大会が松山市立石井東小学校を会場にして開催されました。

本大会では、研究主題「一人一人が生き生きと取り組む体育学習の追求—能力に応じた自己実現をはかることを目指して—」に基づく、生涯体育・スポーツを志向する小学校体育の具体的実践として、各種運動の特性と個人差に応じた学習指導に重点をおいた公開行事及び公開授業を展開いたしました。また、分科会Ⅰでは会場校及び本県の先生方、分科会Ⅱでは他の中・四国各県の先生方による、分科会主題を踏まえた研究発表が実践に基づいて行われ、活発な研究協議がなされました。さらに、全体会においては、中・四国小学校体育連盟顧問・北島豊先生

による適切な全体指導及び文部省体育官・杉山重利先生による有益な御講演をいただき、本大会の意義及び成果を多くの参会者の方々と共に確認することができました。

このように本大会を成功裡に終えることができたのは、講師の先生方の御教示はもちろんのこと、格別の御支援・御協力をいただいた愛媛県教育委員会、松山市教育委員会、関係教育諸団体をはじめ、会場校及び役員の方々の御尽力の賜物であります。

したがって、中・四国小学校体育連盟及び愛媛県小学校体育連盟としても、本大会の多大な成果を今後の小学校体育の充実と発展に役立てるべく、鋭意努力したいと決意している次第であります。今後とも中・四国の体育への御理解と御助言をお願いし、本拙文を終わりたいと思います。

第 27 回全国学校体育研究大会
愛知大会を終えて

愛知県実行委員会事務局長
名古屋市立児玉小学校校長

右 高 久 司



第27回全国学校体育研究大会は、去る昭和63年11月17日・18日両日、県下の8市町、15分科会場で、全国から3,700 余名の参加者を迎えて盛大に開催されました。本会を開催するに当たり、文部省、日本学校体育研究連合会、愛知県教育委員会、名古屋市、豊橋市・岡崎市・東海市・武豊町の各教育委員会の絶大なご支援をいただきました。無事、会を終了できましたのも関係各位のご指導、ご協力のたまものと心から厚く御礼申し上げます。

さて、本会を企画するには、日ごろ、研究面の交流が少ない学校、園が一体となって計画を進めなければなりません。そのため、組織の歴史を重んじたり、研究の特色を生かしたりする配慮をしながら、県下全体の調和をはかるための話し合いが進められました。又、文部省からは全国的視野に立つ

て計画の立案や人選に適切なご指導を賜りました。殊に、“シンポジウム”を企画するには多大なご支援をいただいたことを忘れることはできません。準備段階での幾つかの困難を乗り越えて、当日を迎えたというのが偽らざる心境です。



開会式

そこで、2日間を振り返って本会の特色をまとめると次の2つになります。

(1) 解説とシンポジウムの大きな成果

第1日め(11月17日、名古屋市民会館)の開会式の後、「学習指導要領改訂の動向」と題して、文部省体育局体育官・杉山重利氏の解説があり、さらに4名の発言者による「これからの学校体育」と題してのシンポジウムがありました。杉山氏の解説の主な内容として、①小学校の目標と内容を低中学年向けの3段階にまとめて示す。②中学・高校では大幅に選択制が導入される。③学校体育で生涯スポーツを目指しての指導をする。④個人差に応じた指導をする。等が話されました。これを受けてのシンポジウムでは、中京大学学長松田岩男氏の司会で、4名の発言者(埼玉大学教授加賀谷源彦氏、大阪教育大学教授島崎 仁氏、女性スポーツ財団日本支部代表三ツ谷洋子氏、名古屋市立北山中学校校長石黒宏夫氏)が、主に①たくましい体を育てる学校体育②生涯スポーツを目指す学校体育③体育指導者に求めら

れていること、の3点について白熱の討議を展開しました。解説とシンポジウムにより、生涯にわたってスポーツを取り入れた生活をさせるには、運動の好きな子を育てる学校体育を目指したい。自発性・主体性こそ生涯体育の基礎となる。等の主張が浮き彫りになり、参会者に強い印象を与えました。

(2) 集中方式による分科会の成果

第2日め(11月18日、県下15分科会)の分科会のうち、2・3・6・7分科会は、名古屋市総合体育館で集中方式による発表会を敢行しました。本研究大会史上前例のない集中方式を実施するには、広い床面積の体育館に恵まれたことはもちろん、児童、生徒の安全な移動、綿密な役員の支援等多くの問題を克服して実現しています。参会者からは、小中学校の授業が参観でき、小学校2年から中学校3年までの指導の違いがよく分かったと好評でした。

最後に、次の千葉県大会の成功を心から念じまして、愛知大会の報告といたします。

— 分科会会場参観記 —

〈副会長 林田昭喜〉

第12分科会 県立旭野高等学校 山北堯彦

地域社会に密着した教育活動と生涯体育の推進をねらいとして、地域の民俗芸能(愛知県無形民俗文化財)「棒の手」を手具体操としてアレンジし、体育大会を発表の場とした教材を研究授業として拝見した。

本校では体育大会のなかで、1年生は男女全員による徒手体操で基礎基本を養い、以後、男子は2年生「棒の手」、3年生「組み立て体操」、女子は2年

生「ダンス」、3年生「民踊」と位置づけ、中味に地域性を加味して学校の伝統行事にすると共に、発達段階をふまえた配慮がなされ、これらの種目は保健体育科教員主導で実施していると聞く。棒の手を発表する生徒諸君の生き生きとした姿に感動すると共に、やゝもすれば、体育大会を生徒会にまかせばなしで、折角の体力づくりの機会を結果的に放棄している傾向がある昨今、改めて、本校の指導方針の中から、見習うべき点の多いことに気づいた1日であった。

〈理事長 浅田隆夫〉

第1分科会々場 名古屋市立二城幼稚園

11月18日(金)、午前9時30分より同11時前まで参観(林田昭喜副会長も同道)。本会場の参加者は約70名(幼稚園教師・内女子60名)。

15年の歴史をもつ本園のキャンパスは小学校と併設。昭和52年独立(4才児・5才児ともに3学級編成……男子89名・女子95名)、園舎・運動場の他、総合遊具類の完備(各教室にはそれぞれ手洗い場とトイレが付設)していることが一見して知られる。

本園の教育目標は「明るく元気な子」「すすんで

物事に取り組む子」「がんばりぬく子」「思いやりのある子」「みんなと仲よく遊ぶ子」に育てることにあり、当日の公開保育は、「すすんで体を動かし、いきいきと活動する子どもを育てる運動遊び」を研究主題として各クラスとも、子どもの自由裁量にまかせた室内・屋外での自由遊びが行われていた。時間のたつにつれて室内・屋外を問わず、またクラスの如何を問わず、遊びと仲間の流れができ、個人遊びよりも友達とかかわって遊びを楽しむ子どもの姿が目につき、教師が子どもから遊びを引き出す誘いかけに努力が払われていることが印象的であった。

〈常務理事 伊藤順蔵〉

実行委員会会長山本八郎先生と、まづ名古屋市長合体育館を訪れた。会場ではレインボーホールで同時に三つの公開授業が行われていた。「器具を使っての運動」「折り返し障害物リレー」「跳び箱運動」であったが、楽しく取り組み運動をする喜びを味わせようとする二・三年生から、更に記録向上・体力増強を狙う六年生まで、指導者の配慮が行き届いていることに感心した。また第二・三競技場では、ダンスと柔道で生徒自身が課題に真剣に取り組んで

いた。

次いで港養護学校のホッケー競技を見学した。ゲームでの運動量の多さと明るさには本当に驚き、指導者の安全への配慮はいかばかりかと敬服した。

午後は第10分科会場の桜台高校の、生徒が主体的・意欲的に取り組む体育授業のあり方についての研究発表会場を訪れた。そして実験的で丁寧な指導案の発表を聞いた。充分な時間をかけられなかったけれども、私にとって貴重な経験をさせていただいたことに感謝している。

〈常務理事 鈴木文夫〉

第14分科会 県立名古屋西高等学校校長 伊藤正三
第11分科会 県立西春高等学校

大会第2日・第11分科会県立西春高等学校における公開授業1年クラブ活動および研究授業3年バレーボールを参観、クラブ活動は一・二年継続して行われ、男子6種目女子6種目計12種目を同時開講し、体育教師はもちろんのこと一般教科の教員も指導にあたる授業が展開され、将来の選択制導入になるものと思われた。つづいて研究授業バレーボールは、

〈常務理事 三浦一郎〉

第5分科会 岡崎市立小豆坂小学校校長 山内 満
本校の研究主題は「健やかで活力あふれる子どもの育成をめざして」——一人ひとりが意欲を高める体育学習——であった。当日は好天に恵まれ、公開授業は参観者も背のびをしてみる程多数で盛会であった。公開授業はどの学級も児童の心をゆさぶる適切な課題をもたせ、一人ひとりが生き生きと活動し、楽しさに満ち溢れた顔、汗を顔中一杯にして練習している姿に感銘した。特に、器具や器械を使っている

〈学体連事務局長 重田 一〉

第13分科会 県立三好高校校長 浦野 誠

名古屋から地下鉄で20分赤池下車。ここから車で10数分。土地が沢山空いて、空気も清く、これから発展する所と感じた。通された校長室に掲げられたこの顔が眼をひく。教頭の高藤先生は、普通科

作
が
耐
力
中
性
校
創

チームプレイ レフェリングを中心に展開され、生徒の自主行動に見るべきものがあつた。午後第14分科会 県立名古屋西高等学校における研究協議に参加約70名による協議でテニス(硬式)陸上(50m走12分走)柔道・サッカーについて行われた。短時間における先生方の協議に、生涯教育に対する研究指導が伺われた。両分科会を訪問し両会場とも将来への授業研究とともに、生涯教育に関する授業研究がなされていることが印象的であった。

は動きや技がよく、自信と意欲に満ちた学習活動だった。

第9分科会 豊橋市立南部中学校校長 原田清務

研究主題「自主性に富み、礼節を重んじる、たくましい生徒の育成をめざして——格技(剣道)指導を中心にして——」に、全校体制で取り組み、その成果が、公開授業と公開演技そして研究発表に見事な形で表れていた。互角練習や試合では生き生きとした目つきで意欲的な活動、礼儀正しく節度をもっての試合そして気迫に満ちた練習の姿は印象的だった。

21学級、県下唯一の体育科6学級、昭和50年度創立の学校と説明して下さる。「剣道の特性を生かし、個人差を配慮した学習課程の工夫」がテーマの2年生の授業。指導者は剣道の専門の由。説明は簡明、具体的で、運動量が多く、生徒はよく動く。10:50からの柔道はサッカー専門の先生が指導していると聞く。生徒の素直さが分る。服装を正せといわれなくてもその通りになっている。日頃の指導が分る。前回り受け身の手と足のちぐはぐが散見される。手のつき方にも注意を要する。全般に、終始一生懸命の指導は好感もてる。県立安城南高校の柔道のビデオと誌上発表も行われた。

〈常務理事 神田俊郎〉第8分科会 東海市立平洲中学校校長 廣瀬初彦。施設・設備は細かいところまで行き届き、校庭は広く植込みも多く、恵まれた環境である。公開授業は、「生徒が意欲的・主体的に活動する授業の展開をめざして」を研究主題として3男のマット運動、2男のバレーボール、3女の陸上であった。どの授業も、生徒一人一人が、学習するめあてと課題をしっかりともち、明るく生々と活動していたのが印象的であった。この学校の研究成果の特徴は、各運動種目について、生徒の習熟度別

に学習メニューを作成し、それを活用して生徒の意欲や主体性を育成しているところにあると感じた。第4分科会 知多郡武豊町立緑丘小学校校長 川口茂徳。午後になり、研究発表、研究協議の時間帯に到着。研究の進め方が組織的に計画化され、しっかりと進められている。具体的な内容として(楽しく、意欲をもって活動できる授業の研究ということで、(ア)指導方法の工夫、(イ)基礎体力の向上をめざす活動、(ウ)基本技能の習得をめざす活動、(エ)指導技術を高める活動等々について、密度の高いものであった。

学体振レポート

私の高校サッカー時代の思い出

〈コーチとの再会〉

榎並商事株式会社代表取締役

榎 並 秋 晴



今年の全国高校サッカー選手権大会を、TV観戦しました。サッカー王国の千葉と静岡のレベルの高さには驚かされました。さて、私は28年前、郷里新潟で高校時代サッカーをしていました。当時の県下での高校チームは新潟市内で2校、長岡、柏崎で各1校の4チームだけでした。インターハイでも、国体予選でも試合は準決勝から始まり、二回勝ち進めば優勝です。我がサッカー部員は貧しい者が多く、スパイクシューズを持っている者が少なく、大多数の者は素足でボールを蹴っていました。12月下旬になると小雪が降り初め、寒く、皮が固くなり蹴ると痛いボールを誰れもが黙々と蹴って練習していたものです。設備も用具も満足になく、その上雪国で

あり、更に「良き指導者」もいなかったのですが、それでもサッカーの魅力にとりつかれ退部者はいませんでした。勝てない我がチームが宿敵を破る時が来ました。夏合宿の直前に思いきって、早大サッカー部宛にコーチ依頼の手紙を出したのです。来ました、予想もしなかった現役主力メンバー(後にオリンピック候補選手にもなった)のA氏が来てくれたのです。そのA氏と昨年末に28年ぶりに会うことができました。今は保険会社社長です。話は28年前に飛び、しばし懐かしい思い出話もつきませんでした。その後仕事の上でもお世話になり、再び元コーチとの交りがはじまりました。高校時代のサッカーを通じて手に入れたものが大きかったようです。

事務局だより

1. 昭和63年度・平成元年度理事・評議員等一覧

役職名	氏 名	勤 務 先
会 長	大石三四郎	学校法人埼玉短期大学 長
副 会 長	林田 昭喜	大阪府立清水谷高校長
理 事 長	浅田 隆夫	目白学園女子短期大学 教授
常務理事	伊藤 順蔵	早稲田大学教授
	江田 昌佑	筑波大学教授
	長田 一臣	日本体育大学教授

事務局 重 田 一

役職名	氏 名	勤 務 先
常務理事	加室 一臣	東京都立神代高校長
	神田 俊郎	三鷹市立第一中学校長
	鈴木 文夫	筑波大学教授
	武内 法子	江戸川区立鹿本幼稚園長
	三浦 一郎	江東区立明治小学校長
監 事	浜口 義春	練馬区立開進第三中学校長
	金森 久	東京都立北高校長
	山崎 宏久	江戸川区立下小岩小学校長

No	理 事			評 議 員	
	県 名	氏 名	勤 務 先	氏 名	勤 務 先
1	北海道	栗城 正	札幌市北区家庭児童相談員	杉本 幸一	札幌市立大谷地小学校校長
2	青 森			玉置 重実	北海道札幌南陵高校教諭
3	岩 手			花田 陽悟	青森県立青森高校校長
4	宮 城	洞口 六夫	宮城教育大学教授	伊藤 章一	岩手大学教育学部教授
5	秋 田			高木 力雄	宮城教育大学助教授
6	山 形			工藤 一郎	秋田市立八橋小学校校長
7	福 島			大沼 英夫	山形県立東根工業高校校長
8	茨 城			鈴木 勝衛	いわき明星大学教授
9	栃 木			都筑 積	水戸市立堀原小学校教諭
10	群 馬	板井 和男	群馬県立沼田女子高校校長	猪野 清	栃木県立国分寺養護学校校長
11	埼 玉			橋爪伊勢雄	前橋市立城東小学校校長
12	千 葉	鈴木 純也	千葉県立君津高校校長	長谷川肇志	埼玉県立浦和高校長
13	東 京	清水 善之 佐野 和夫	新宿区立大久保中学校校長 東京都立南多摩高校校長	小池 政嘉	千葉市立星久喜中学校校長
14	神奈川	小川 雅以	横浜市立万騎が原小学校校長	黒部 光雄 松永 安誠 松田 智男	千代田区立麹町小学校校長 東村山市立第一中学校校長 東京都立八王子北高校校長
15	山 梨			豊島 和男 統橋 仁子	神奈川県立大和高校教諭 神奈川県立上溝高校教諭
16	長 野			根岸 昭	山梨県立富士見養護学校校長
17	新 潟	貝谷 東吾	新潟市立東山の下小学校校長	稲田 実一郎	上田市立上田第二中学校校長
18	富 山			小黒 英作	新潟県立新潟北高校校長
19	石 川			中川 周三	富山県立小杉高校校長
20	福 井			中森 智	金沢市立大浦小学校校長
21	岐 阜			藤田 美範	福井市光陽中学校校長
22	静 岡			田中 猛	岐阜県立岐阜女子商業高校校長
23	愛 知	新屋 哲夫	愛知県立津島東高校校長	斎藤 欣三	静岡県立焼津中央高校校長
24	三 重			水野 辰美 右高 久司	蒲郡市立形原小学校校長 名古屋市立児玉小学校校長
25	滋 賀			辻村 侃三	伊勢市立進修小学校校長
26	京 都	中大路 勉	京都市立朱雀第一小学校校長	蒲山 義雄	彦根市立佐和山小学校校長
27	大 阪			岡村 一穂	天田郡三和町立細見小学校校長
28	兵 庫	上井 寛之	兵庫県立多可高校校長	楠本 正輝 橋 中	大阪府立天王寺小学校校長 吹田市立竹見台小学校校長
29	奈 良	上田 輝典	奈良県立五条高校校長	広瀬 勝一 中谷 元紀	兵庫県教委体育保健課副課長 兵庫県主計指導主事兼学校体育係長
30	和歌山			吉村 俊夫	奈良県磯城郡田原本町立田原本北小学校校長
31	鳥 取			加藤 晃	和歌山市立中之島小学校校長
32	島 根			池原 範雄	鳥取市立面影小学校教頭
33	岡 山			山崎 忠志	松江市立内中原小学校校長
34	広 島			伊井 一敏	岡山市立清輝小学校校長
35	山 口	前田 勇四	山口県教委保健体育課長	種村 重明	広島県立紙園北高校校長
36	徳 島			河村 文人	岩国市立東中学校校長
37	香 川			中川 温子	徳島県立国府養護学校池田分校教頭
38	愛 媛			山口 賢次	香川県立高松西高校校長
39	高 知	前田 幹夫	高知大学教育学部長	三原 孝教	松山市立雄新中学校校長
40	福 岡	毛利 茂雄	福岡市立梅林中学校校長		
41	佐 賀			今村 幸光 近藤 弘良	福岡市立別府小学校校長 福岡県立嘉穂工業高校校長
42	長 崎			中島 照久	佐賀県立鳥栖工業高校校長
43	熊 本	荒木 時彌	熊本県立大津高校校長	安部 裕	長崎県立島原高校校長
44	大 分			下川 和幸	熊本市立西原中学校校長
45	宮 崎	松田 義信	宮崎県立宮崎南高校校長	姫野 裕輔	大分市立坂ノ市中学校校長
46	鹿 児 島				
47	沖 縄			松山 良弘 花城 清英	鹿児島市立鹿児島商業高校校長 宜野湾市立大山小学校校長

2. 全国学校体育研究大会

(1) 平成元年(1989年)11月9日(木)、10日(金) 第28回大会 千葉県

(2) 平成2年(1990年)10月中旬 第29回大会 北海道

3. 全国学校体育研究大会東・中・西部別地区別開催一覧 平成元・2・20

年度 昭和 平成	地区 回	東 部			中 部			西 部			
		北海道	東 北	関 東	甲 信	東 海	北 陸	近 畿	中 国	四 国	九 州
37	1			千 葉							
38	2							兵 庫			
39	3								鳥 取		
40	4			東 京							
41	5					岐 阜					
42	6							大 阪			
43	7		福 島								
44	8									高 知	
45	9										長 崎
46	10			埼 玉							
47	11						福 井				
48	12							和歌山			
49	13		山 形								
50	14			東 京							
51	15							滋 賀			
52	16										熊 本
53	17			群 馬							
54	18			東 京							
55	19			東 京							
56	20							大 阪			
57	21						新 潟				
58	22			神奈川							
59	23										沖 縄
60	24										鹿 児 島
61	25							兵 庫			
62	26		宮 城								
63	27					愛 知					
元	28			千 葉							
2	29	北海道									
計		1	3	9	0	2	2	6	1	1	4

4. 都道府県会長決定の時期について

例年第1回の理事・評議員会を4月下旬に、昭和3年度は5月6日に行った。各都道府県選出の評議員定数は55名、理事は全員で28名、監事が3名であるが、出席は毎年40名前後。寄附行為第19条(役員任期)第3項に「役員は、その任期満了後でも後任者が就任するまでは、なお、その職務を行う。」とあるものの、これの実行はむずかしい。そこで、昨年、6月30日までと区切って、都道府県の会長が何月何日に決まったかを知らせて頂いた。33府県からのご返事の内訳は、3月2県、4月2、5月9、6月19、7月1県、計33府県となった。新たに会長(即、評議員と考えてよい)となった頃に、全国からおいで頂くのがよいのではないかと考え、平成元年の第1回理事・評議員会は6月16日(金)、事務局を置いている国立オリンピック記念青少年総合センターで行うことにした。

但し、寄附行為第13条には、「収支決算は、毎会計年度終了後二箇月以内(4月、5月のうち)に…報告しなければならない。」となっているので、監査を受けた後、収支決算書案を作成し、理事・評議員に送付、いわゆる持ちまわり閣議のようにしてその承認を頂いて、文部大臣に報告することを、63年11月17日(木)、名古屋における理事・評議員会で決めて頂いた。

5. 都道府県代表者会議・地区別協議会…11月16日(水)名古屋で開催…に関するアンケート集計について

昭和63年9月20日を期限として、都道府県会長、評議員、理事を対象に、上記のアンケートの回答をお願いした結果が、このようになった。11月の会議の席上、鈴木文夫常務理事から説明があった。

(1) 都道府県段階における学体連の活動を活性化するための方法について

1. 組織作りについて

ア 現行のままでよい	27
イ 地域の実情による	19
ウ その他	5

(意見)

- ・都道府県でよい
- ・全体組織も必要(個別組織であるが)
- ・幼小中高の統合

2. 活性化に役立つ方法

①活性化に役立つ方法

ア 研究協議会と実技研修会の組合せ	26
イ 講習会	19
ウ 研究協議会	15
エ 実技研修会	5
オ その他	3

(出版、機関誌、資金面)

②研究テーマ

小学校		
・生涯体育	20	
・個人差に対応	17	
・指導法	6	
・体力	5	
・教育課程	5	
・実技研修	5	
※健康、女性教諭、評価		
中学校		
・個人差に対応	16	
・生涯体育	13	
・指導法	12	
・選択	7	
・体力作り	4	
高校		
・生涯体育	16	
・指導法	14	
・選択	12	
・個人差	4	
・体力作り	4	

(2) 都道府県学体連のあり方・活動の活性化について

- 財源の不足
- 幼小中高の交流
- 行政との関わり
- 研究協議会の開催
- 事務局の充実・表彰について

6. 平成元年の事業について

(1) 第28回全国大会 11月9日(木)、10日(金) 千葉県

(2) 優良校・功労者表彰 11月9日(木) 千葉県

(3) 講習会・研修会

1) 第20回全国学校体育実技研修会小学校の部
8月3日(木)・4日(金)2) 第20回全国学校体育実技研修会幼稚園・保育園の部
8月10日(木)・11日(金)3) 第9回障害児キャンプ指導者講習会
8月17日(木)～19日(土)2泊3日 山中湖

7. ビデオカセットをおわけします。

あなたは女性
妊娠と出産 } いずれも企画は日本母性保護
避妊の科学 } 医協会 文部省選定
男性の生理 } VHSでもベータでも1本 ¥20000
青春の医学 }

追加販売

The思春期 Part I 日本母性保護医協会企画
VHSでもベータでも1本 ¥20000受胎 生命の誕生をとらえたドキュメント
¥9,800

お申込みは学体連へ--- 03-465-3954・7464

***** 編集後記 *****

「汗を出せ、知恵も出せ。」「走りながら考え、考えながら走れ。」天野彰夫先生(愛知教育大学教授)の論説のなかにある言葉です。日頃の指導がややもすればマンネリ化しがちな私には、はっとさせられるものがありました。名古屋で開催された第27回全国学校体育研究大会(参加者3,700余名。)は関係各位の御尽力で本研究大会史上前例のない集中方式で授業発表会が行なわれるなど画期的な企画での大会でした。大会に助言者として出席した先生方には、分科会の発表・討議をふまえて「やる気をおこさせる体育の学習指導」について執筆していただきました。常務理事の先生方には分科会会場を廻っての感想をまとめていただきましたので大会の雰囲気

を想像していただければと思います。

今回の学習指導要領の改訂で格技が武道へ名称が

変えられます。43年ぶりに体育の授業に武道が戻ったわけで論議をよぶところですが、文部省初等中等教育局教科書調査官、丹羽昇先生に改称に至った経過、改訂の要点などについて執筆していただきました。時の流れ、人々の考え方の変化などに対応したかたちで、指導要領は改訂されて来ているように思います。学校での話し合いの資料として活用していただければ幸いです。御意見などありましたら寄稿してください。編集会議のたびに会報のなかに現場の先生方の実践記録、論説、意見をどしどし掲載するようにしたいと話し合うのですが、実現できずにあります。昭和から平成に改元されたことでもありますので、多くの先生方の今まで以上の御協力を得て先生方の記事を誌面を埋めていく方向で編集したいと思います。よろしく願い致します。

編集委員 伊藤忠一